

ホラーティウスのカルミナ III₁₋₆

松 田 治

I

私は俗衆とは無縁であり、これを遠ざける。沈黙を守るがよい。かつて誰も聞いたためしのない詩を、ムーサエの神官たる私が、少女たち少年たちに歌ってきかせよう¹¹(4)。

恐るべき王たちは自分の民を支配し、王たち自身には、巨人族に対する勝利で名高く、すべてを眉一つで動かすユーピテルが君臨している(8)。

他人にまさって広々と畝に木を植える²¹ 男があれば、より高貴な生れを誇って、候補者として、マルスの野へ赴く³¹ 者もいるし、一方品行と名声でまさる者が(12)。

これに対抗する。またある者は子^{クリエンテス}分の群が相手より大きいのをたのみとする。だが必然女神^{ネケツクース}⁴¹ は平等の掟によって著名な者にも、最も賤しい者にも運命を決定する。大きな壺がすべての名前を揺り動かす(16)。

抜身の剣を不埒な頭の上に吊り下げられているような男には、シキリアの饗宴といえどもはや素晴らしい味わいを与えることはないだろう⁵¹。小鳥の歌も^{キタラ}堅琴の音も(20)

眠りをもたらしはすまい。農夫たちの甘い眠り⁶¹ は、彼らの粗末な家も、木影に包まれた岸辺も、心地よい^{セフニ}西風にさわぐ谷間^ル⁷¹ も避けることはない(24)。

必要以上に欲をもため者を、荒れすさむ海が、沈みゆく大角^{フルクトウルス}星や昇る小山^{ハエドウス}羊星の烈しい攻撃が、不安に陥れることはなく(28)。

霰にたたかれた葡萄樹や、約束を偽る土地⁸¹ ——果樹類があるときは雨を、あるときは畑を焦す星々を、ときには冬の酷寒を恨んで——が、彼を心配させるこ

とはない(32)。

魚は海に礎石が投げ込まれると水が圧縮されたことを感じる⁹¹。そこへ、多くの職人を従えて忙がしい請負人と陸に耐えられなくなった¹⁰¹ 主人が野面石を(36)

投げ落とす。恐れと脅迫^{ティモル ミナエ}¹¹¹ は主人が行く所へ向って行く。そして青銅の船嘴をそなえた三段櫂船からも降りず¹²¹、彼が馬に乗ればその背に黒い憂惶が座るのである(40)。

だからもし、苦しむ者を、フリュギア産の大理石¹³¹も、星よりきららな深紅の織物の利用も、ファレルヌム葡萄酒¹⁴¹も、またペルシャの香油もなぐさめてはくれないのなら(44)。

なにゆえ私は、妬をさそう扉を用い、新しい様式で豪華な広間を造ろうか。なにゆえサビーナの谷を取り替えようか、いやます苦勞の種となる財富などと(48)。

II

辛い乏しい生活をむしろ進んで耐えるよう苛烈な軍務で鍛えられた若者はよく学ばねばならぬ。またパルティアの猛卒らを槍恐るべき騎士として攻め悩まさねばならぬ(4)。

そして野外で、危険に身をさらして生活するがよい¹⁵¹。彼の姿を、戦っている王の妃と年頃の姫が敵の城壁から眺めつつ¹⁶¹(8)。

溜息をつくがよいのだ、なにとぞ¹⁷¹ 戦に不慣れな王家の許嫁が、触るにも恐ろしい獅子、血まみれの怒りが殺戮の真只中へ運び去る獅子を喉さぬように、とおののいて(12)。

祖国のために死ぬのは楽しく、美しい¹⁸¹。死は、逃

げる男を追い求め¹⁹⁾、勇気のない若者のひかがみも臆病な背をも容赦しない(16)。

男らしさ²⁰⁾は、落選の恥辱を知らず、けがれない名譽に輝き、民衆のひいき次第で斧²¹⁾を取りあげたり与えたりはしない(20)。

男らしさは、死に相応しからぬ人々に天を開圻し、拒絶された²²⁾道により前進を図り、そして俗人の集団や濡れよごれた地界を見捨てて羽ばたき去る(24)。

また誠実な沈黙には安全な報酬がある²³⁾。私は禁じよう、神秘的なケレースの儀式を暴露した者が、私と共に、同じ屋根の下にいたり、あるいは脆い軽舟に(28)

乗ったりすることを。しばしばディエスピテル²⁴⁾は、ないがしろにされると、罪なき者と悪人²⁵⁾との見境なしに、罰をくださった。悪党が先を越していても懲罰女神がこれを取り逃がしたことは滅多にない、跋足ながらも(32)。

Ⅲ

正しく、意志強固なる男を、邪曲を命じる市民の熱狂も、脅迫的な暴王の表情も、その岩の如き心の底から動揺せしめはしない。また、騒ぎたつアドリアの(4)

荒れすさむ王者アウステル(南風)も、雷霆をふるうユーピテルの強大な手も、これを揺がしはしない²⁶⁾。よし宇宙が粉々になって崩壊しよう、その破片は打つであろう、恐れる色もない彼を(8)。

こういう操行²⁷⁾によってポルルックスや遍く遠征するヘルクレースは火と輝く天界へよじのぼり、到達した。そして彼らのあいだに横たわってアウグストゥスは朱色の唇²⁸⁾で神酒を飲むだろう(12)。

これによって²⁹⁾功績のあったあなたを、父なるバックスよ、服従に慣れぬ首にくびきをつけたあなたの虎が運んでさしあげた。これによってクイリーヌス³⁰⁾はマルスの馬に乗って黄泉の国から逃がれたが(16)。

それはユーノーが、協議中の神々に喜ばしい言葉を語ったときであった。「イーリオン³¹⁾を、宿命的な、

不正な審判者と外つ国の女³²⁾が灰塵に(20)

まみれさせたが、そのイーリオンは、神々³³⁾をラーオメドーンが約束の報酬を与えずに騙して以来、国民も不正な王も共に、私とけがれないミネルウァに引き渡されていたのだ(24)。

もはやスパルタの姦婦³⁴⁾の悪名高い客人がまばゆく輝くことはなく、誓いにそむくプリアモスの館が、闘志さかんなアカイアびとらを、ヘクトールの力で撃退することもない(28)。

それに、私たち(神々)の不和で長びいた戦争も静まった。だからすぐに、マルスに免じて、大きな怒りを捨て、トロイアの巫女³⁵⁾が生んだあの憎らしい孫を(32)

許してあげよう。彼が輝かしい住居へ入るも、神酒^{ネクタル}の味に親しむ³⁶⁾も、そして神々の平和な世界に記名されるも、私は認めてあげよう(36)。

洋々たる海がイーリオンとローマのあいだで荒れている限り、追われた者たちは己れの好きな場所で俸せ多く支配するもよい。プリアモスとパリスの墳墓³⁷⁾に畜群が(40)

跳びかかり、野の獣がその仔らを何の懸念もなく隠してられる限り、カピトリーウムは陸離として立ち、征服されたメーディー人³⁸⁾に果敢なローマは法を与え得るであろう(44)。

遍く恐れられて「ローマは」その名をはるかな遠界までも広げるであろう、あいだを流れる海³⁹⁾がエウローパをアフリカから分けている国や、ふくらむニールス河が畑野を侵す国まで(48)。

発見されぬ黄金は、大地が隠しているので最良の場所にあるが、「ローマ人は」これを、聖なるもの一切を掴みとる手で、人間の利用に供すべくかき集めることなく、軽蔑する心意気をもって(52)。

立ち塞がる世界の涯がいかなるものであれ武器でこれに触れるであろう、どこで火が燃えさかっているか、どこで霧や雨が荒れているか、見きわめんと勇み立つ

て (56)。

だが私はこの運命を、好戦的なクイリーヌスの民⁴⁰⁾に、祖先を尊ぶのあまり、また自らの幸運におごるあまりに、祖国トロイアの家々を再建しようなどと考えぬように、との条件で予言するのだ(60)。

兇兆のもとに復興するトロイアの運命は悲惨な破壊をもって繰返されるであろう、そのときは勝ち誇る軍勢を私が、ユーピテルの妻にして姉妹たる私が導くのだ(64)。

三たび青銅の城壁がフォエブスの手によって立ち現われるとも、三たび私のアルゴスびとら⁴¹⁾によって打ち倒され滅びるだろう、三たび捕われの妻は夫を、子らを案じて泣くことであろう」(68)。

さてこんな調子が陽気な^{リュトラ}豎琴に合うわけはありません。ムーサよ、どこへ行こうというのです。執念く神々の話を語るのはおやめなさい、そして雄壮な事柄をそんなちっぽけな旋律に合わせて小さくすることも(72)。

IV

空から降りて下さい、そして、笛に合わせて、女王よ、カルリオペーよ⁴²⁾、長い調べを歌って下さい、あるいは今日は、お望みなら、よく響くお声だけで⁴³⁾、あるいはフォエブスの^{キトラ}絃楽器や豎琴に合わせて⁴⁴⁾(4)。

聞こえますか⁴⁵⁾。それとも楽しい錯乱⁴⁶⁾が私を誑かしてるのだろうか。そして私はこれを聞き、聖い森の中をさまよってるような気がする。その森は心地よい水と風が流れているのだが(8)。

幼いころ、アプーリアのウォルトウル山で、乳母ブルリアの家の外に出て⁴⁷⁾遊びつかれ眠りづかれてしまった私を、おとぎ話に現われるような鳩たちが新しい葉で包んでくれた(12)。

高いアケルンティアにあるねぐら、バンティアの森、低いフォレントゥムの沃地⁴⁸⁾などに住むあらゆる人々には、奇蹟とも思えたのだった(16)。

私が黒い蛇や熊に傷つけられずに眠り、神々から勇気を授けられた子供として、よせ集められた神聖な月桂樹とミルテ⁴⁹⁾に埋もれて横たわっていたのは(20)。

あなたがたに、カメーナエ⁵⁰⁾よ、あなたがたにお仕えしているのです、私が険しいサビーナの土地⁵¹⁾へ登っていくときも、涼しいプラエネステや、なだらかに坂をなすティーブルや、気候の良いパーイアエ⁵²⁾へ出かけて楽しむときも(24)。

あなたがたの泉にも歌舞隊にも親しい私を、ピリッピーでの潰走も⁵³⁾、呪われた木⁵⁴⁾も、パリヌールス岬⁵⁵⁾もシキリアの波浪で、消し去ることはできなかった(28)。

あなたがたが私と共にある限りいつでも、喜んで私は航海者として荒れ狂うボスフォルス⁵⁶⁾へ乗り出すだろう。また陸を旅してアッシュリアの海岸の焼けつく砂をも厭わぬつもりである(32)。

私は、傷ひとつ負わず、見とどけてくるであろう、外国人に対して残忍なブリタンニア人や馬の血に喜ぶコンカーニー人を、箆を背負ったゲローニー人⁵⁷⁾やスキュティアの河⁵⁸⁾を(36)。

あなたがたは高貴なるカエサルが、軍務に疲れきつ兵た士らを町々に引退させた⁵⁹⁾あと、自分の労苦を終らせようと努めるやいなや、ピーエリアの洞窟⁶⁰⁾で疲労をいやして下さる(40)。

あなたがたは穏やかな助言を与え、そして与えた結果に喜ぶ⁶¹⁾、恵み多い女神たちよ。私どもは知っている、神々を敬まわぬティーターン族を、その巨大な一群を、雷霆ふるって撃退したあの有様を(44)。

動かぬ大地、風浪烈しい海、そして諸都市を、また神々を、人間の群を、一人で、依怙ひいきのない力で支配する、あの御方が(48)。

腕を振り立てて自信にみちたかの若者たちと、緑陰ゆたかなオリュムポスにペーリオン山を乗せようと力を合わせた兄弟⁶²⁾が、ユーピテルを大いに脅かした(52)。

しかしテュフォーエウスや剛力のミマース、あるいはおどし迫るポルフェリオンが、ロエトウスや、木の幹を引き裂いて大胆不敵に投げつけるエンケラドゥスたち⁶³⁾が (56)

パルラスの鳴音たかい楯に突進して、いったい何ができたか。彼女に味方して、闘志に逸る⁶⁴⁾ウォルカーヌスが、また尊いユーノーが立ちはだかっていた。それに、決して肩から弓を投げ捨てなどせぬであろうあの御方も一緒なのだ (60)。

とけた髪をカスタリアの泉⁶⁵⁾の澄水で洗い、リュキアの蒼林や、生まれ故郷の森に住まうデーロスの、パタラのアポロー⁶⁶⁾が (64)。

分別を欠く力は自らの重みで崩れ去る⁶⁷⁾。適切な力をこそ神々もまたより高く引き上げて下さる。この同じ神々、が力づくであらゆる不正をしよう^{ネプテリス}と心に図る子どもを憎悪する (68)。

私の意見の何よりの証人は、かの百手巨人であり、けがれなきディアーナの誘惑者で、処女の矢に制せられた、かの名高いオーリーオンである (72)。

自らの生んだ怪物どもを投げこまれて大地女神は呻き、雷霆によって、蒼白いオルクスの国⁶⁸⁾へ送られた子供らに涙する。そしてその上に被せられたアエトナを速やかな火が貪り尽したということはない (76)。

また、抑制を知らぬティテュオス⁶⁹⁾の生肝を、その罪の番人となった鳥が捨て去ることもなかった。恋するピーリトウス⁷⁰⁾を三百の鎖が縛りつけているのだ (80)。

V

雷霆をとどろかせるユーピテルが天界に君臨することを私たちは信じていた。地上ではアウグストゥスが神と見做されるであろう、ブリタンニア人や重くのしかかるペルシア⁷¹⁾人らが帝国に加えられたときに(4)。

クラッスス⁷²⁾の兵たるものが夷狄の女を妻として、その夫となってよく生きてこれたものだ。あまつさえ——ああ、元老院と道義の何たる退廃ぞ！——敵である義父らの軍隊に入って老いたというのか (8)。

メーディアの王のもつで、マルシー⁷³⁾やアプーリアの男たるものが。聖なる楯も名前も寛衣も忘れ果て、不滅のウェスタ⁷⁴⁾も忘却したのだ、ユーピテル〔の神殿〕とローマの都は屹立しているというのに (12)。

このことを警戒していたのだ、不名誉な条件を拒け、もしも憐憫に値しない若者たちが捕虜となったまま死ぬのでなければ、将来に破綻を招くであろう⁷⁵⁾先例を (16)

残すことに同意しなかったレーグルス⁷⁶⁾の鋭い考察は。「私は、カルターゴの神殿に、〔ローマ〕兵士から刃に血ぬらずに奪い取られた軍旗と武器が (20)

打ち付けられているのを見ました」と彼はいった。「この目で見ただ、ローマ市民の腕が、本来自由人たる⁷⁷⁾彼らの背中で戒められているのを、開放された城門を、我らのマルスに荒らされた土地がまた耕やされるのを⁷⁸⁾ (24)。

間違いなく、黄金で買い戻された者は、いっそう大胆な兵士として帰ってくるであろう⁷⁹⁾。しかし諸君は恥辱に加えるに損失⁸⁰⁾をもってすることになる。真紅で染められた羊毛も、失なった色を回復することはない (28)。

また、真実の勇氣というものは、ひとたび消え失せるや、いやしむべき人間の胸にたち返ろうとは欲しないのだ。厚い罨を脱した鹿がもし戦うなら⁸¹⁾、信用できぬ敵を信じきった者も (32)

勇者となるであろうし、何らなすことなく縛りあげられた腕に革紐の痛さを甘受し、死を恐れた、まさにそのような男が、次の戦いではポエニー人を粉砕してくれるであろう (36)。

この男は、どのようにして生命を保つべきかを知らずに⁸²⁾、平和と戦争を混同してしまったのだ。何たる恥辱ぞ！ ああ偉大なるかな、イタリアの恥まみれの破滅によりいよいよ榮えるカルターゴよ！ (40)。

伝えるところによれば、彼は市民権喪失者⁸³⁾として、貞淑な妻の接吻も幼ない子供たちをも退け、厳然たる態度で雄々しい視線を地に釘付けにしていた (44)。

その間に、動揺している元老たちに例のない権威に裏付けられた助言を与えて激励し、そして、悲嘆にくれる友人たちをかきわけて類まれな亡命者⁸⁴⁾として先を急いだという(48)。

しかしながら彼は夷狄の拷問者が何を準備して自分を待っているか知っていたのだ⁸⁵⁾。それでも彼は立ちをはだかる親しい人々や帰路を遅らせる市民を押し退けた(52)。

そはれあたかも、判決が下されたことにより、被護者たちの長い訴訟に限をつけて、ウェナーフルムの農園⁸⁶⁾カラケダエモニア人⁸⁷⁾の興したタレントウムへでも赴くかのようであった(56)。

VI

父祖の罪を、身に覚えのない汝が、ローマ人よ、償なうことになろう、汝が神殿や神々の崩れかかった祭壇や黒い煙でよごれた神像を新しくするまでは⁸⁸⁾(4)。

汝が支配してられるのは、汝が神々より小なることを認めて行動するからである。ここに汝のすべては始まり、ここですべては終るとせよ⁸⁹⁾。ないがしろにされて神々は悲嘆にくれるヘスペリア⁹⁰⁾に数多の災いをもたらした(8)。

すでに、二度にわたって⁹¹⁾、モナエセスやパコルス軍勢は、瑞兆に恵まれなかった⁹²⁾わが軍の攻撃を粉砕しそして、彼らの小さな首輪に戦利品を付け加えて喜びに輝いている(12)。

内乱の渦巻く都を、ダキア人とアエティオピア人⁹³⁾があわや破壊し尽すところであった、これは艦隊をもって恐ろしく、かれは矢を射ることで並ぶものがない(16)。

罪深い時代は先ずもって婚姻を、血筋を、家庭をけがしてしまった⁹⁴⁾。この源より派生する害悪が祖国に、国民の中に流れ込んだ(20)。

早熟な乙女はイオーニア風の踊りを喜んで学び、手管に習熟する。それも彼女は爪も柔かい時分から⁹⁵⁾すでに不純な色恋を胸に描いているのだ(24)。

〔結婚したと思うと〕すぐに彼女は夫のいる宴席でもっと若い愛人たちを求める。そして気ぜわしく、明りを遠ざけて、禁じられた喜びを与える相手を選ぶのではない(28)。

面前で名ざされるや彼女は、夫も承知のもと、立ちあがる。彼女を誘うのが行商人であろうと、高い値で醜行を買うヒスパーニア船の船長であろうと(32)。

このような親から生まれたのではなかった、カルターゴ一人の血で海を染め⁹⁶⁾、ピュルルスや大王アンティオクス、兇悪なハンニバルら⁹⁷⁾を打倒した若者たちは(36)。

それは農村から出征した兵士たちの男の児らであり、彼らはサビーナの鍬で土を掘り返すようにしつけられ、厳格な母の言いつけに従って(40)。

太陽が、山々の影を移しそして、日輪の去ると共に親切な時間⁹⁸⁾を導いてきて、疲れきった牛たちの軛を外ずしてやる時分になると、切り落してあった薪を運ぶようにしつけられていた(44)。

破壊的な時が、何か減少させなかったものがあるか⁹⁹⁾。父らの時代は、祖父たちのより悪いが、もっと悪辣なわれわれを生んだ。やがてわれわれが、輪をかけて性悪な子供らを生むことであろう(48)。

追記

底本は Friedrich Klingner 校訂のトイブナー版(1959⁸⁾)。Wickham-Garrod のオクスフォード版(1963¹³⁾)も参考にした。利用した註釈書は、Kiesling-Heinze (K. H. と略記, 1968¹³⁾)、T. E. Page (1964年版)、Jules fanin (1885⁶⁾, 訳だけ)、Frédéric Plessis (1966, 写真復刻版)、F. Villeneuve (1929⁷⁾)、F. Klingner, *Studien zur griechischen und römischen Litteratur* (pp.333-43の訳, 1964) Gordon Williams, *The Third Book of Horace's Odes* (1969) など。Porphyrio は、Alfred Holder の *Pomponi Porfyronis Commentum in Horatium Flaccum* (1967, 写真復刻版) を利用。

1) 儀礼的できわめて厳粛な響きをもつこの四行はIII.1-6 全体の序と考えられる(ただし、G. Williams, *Tradition and Originality in Roman Poetry*, 1968, の p. 586 以

下をみよ)。

Odi Profanum volgus : ここで詩人は自分がある種の祭儀を執行する神宮に擬している。Profanumはこの祭儀とは無縁の者をさし、したがって *odi* は、単純に「憎む」とするよりも、「関係がない、関知しない」と解するのが妥当である (E. Fraenkel, *Horace*, 1957, pp. 261-62)。

Hor. が行なおうとしている祭儀は以下六篇の新しい歌を歌女神たち(ムーサエ)に献じることである (*Musarum sacerdos*). Initiation を経ていない者 (βέβηροι, ἀμύητοι, profani, K. H. ad loc., Fraenkel, *ibid.*) に聖域をけがされたくない、そこでこういう衆生を遠ざけ、ついで、いわば職業的祭官が口にするフォーミュラ《favete linguis》(cf. Cie. *de Div.*, III₈₃; *ibid.*, I₁₀₂ 《favert linguis》) によって沈黙するよう念を押す。

Favere はそもそも宗教的言語に属したが、これが *linguis* の他に *ore, verbis, vocibus* などと結ぶ形で儀礼上の表現として残ったのである (Ernout-Meillet, *Dictionnaire étymologique de la langue latine*, 1967⁴)。

Profanum volgus との対立で、これから initiation を受けようとする *virginibus puerisque* に寄せる詩人の期待は大きい。

- 2) *ordinet arbusta sulcis*: 葡萄園作りの準備のこと。
Arbusta は等間隔に掘った畝に植え込まれ、葡萄樹の支柱になる榆などをさす (K. H.). 収益の多い農園を経営する富裕な市民の一例であろう。
- 3) *Porphyrio* 《Candidatum magistratum petendorum significat》. 政務官選挙 (法制定, 開戦・和平宣言などともに *comitia curiata* において扱われる) は通常軍神マルスの野 (Campus Martius) で行なわれた。
- 4) *Necessitas*: 「避けがたいこと, 必然」といった概念の擬人化でギリシアのアナンケー, ヘイマルメネーに相当。I_{35,17}, および投票用の壺と死の宿命のイメージについて III_{3,25-28} を参照のこと。
- 5) シュラーケーサイの僭主ディオニューシオス I 世による「ダーモクレスの剣」のエピソード (Cic. *Tusc.*, V_{21,61,62}). シキリアの饗宴の贅沢さは諺になるほどだったといわれる。
- 6) *agrestium virorum* を *somnus* にかけても *domos* にかけても意味は大して差異はない。*domos* にかけて解釈する (「甘い眠りは農夫たちの家を避けない」) のが大勢である (Plessis, Villeneuve, Klingner, Williams ら)。しかしながら, K. H. がいうごとく, これは *somnus* にかかる属格として解釈した方が意味の上でも文構造的にも均斉がとれてよい。こうすることによって, 農夫の甘い眠りは家にだけあるのではなく, 岸边にも谷間にもあるということがさらに明確になる。
- 7) *tempe* (Tempe, Plessis): テルメー湾に注ぐペーネイオス河を擁するテッサリアの谷テムペ (*Τέμπεη*) の名称がラテン語で普通名詞になったもの (Verg. *Georg.*, II₄₆₃₋₄₇₁, et frigida Tempe/mugitusque boum mollesque sub arbore samni/non absunt 「[農夫たちには] 涼しい谷や牛たちの啼き声がある, そして樹下には眠りがある」)。
- 8) Cf. *Epist.* I_{7,87} 《spem mentita seges, 希望を裏切る畑》。
- 9) *contracta pisces aequora sentiunt*: 誇張した擬人法表現。礎石 (*molibus*) は海中に投げられ, その上に

建物が構築される。古代における自然破壊の一例。

- 10) 建物は海上にせり出すだけだから陸続きではある。
- 11) *Timor, Minae*: 共に概念の擬人化。40行の *Cura* も同様。
- 12) *aerata triremi*: ここでは戦艦ではなくて, 金持ちが遊山に利用する *priva triremis* (*Epist.* I_{1,93}) のこと。富豪が陸を恐れて水辺の家に住もうと, 船上で楽しく過そうと, 馬を駆って安堵しようと, *Timor, Minae, Cura* はどこまでも追ってくる。
- 13) *Phrygius lapis*: フリュギアの町シュンナダ (またはシュンナス) で産する大理石 (cf. *Stat. Silvae*, I_{5,37}; *Mart.* IX_{75,8})。
- 14) *Falerna vitis*: Hor. がとくに愛好した葡萄酒 (カルミナだけで他に五回言及される。I_{20,10}; I_{27,10}; II_{3,8}; II_{6,19}; II_{11,19})。
- 15) 兵役義務は17歳から課せられた (Plessis) が, ここでは, 貧乏とは縁のない上流家庭に生まれ, 将校として入営する若者。
- 16) ホメーロスのヘレネー (*Il.* III₁₄₁以下), アンドロマケー (*ib.*, XXII₄₆₀以下) らの姿を彷彿させる *τεichoσκοπία*。
- 17) *eheu……caedes* は直説法とは見なしがたい。これを二人の女性の言葉とすると「王家の許嫁」(*sponsus regius*) がおかしい。詩人が二人の沈黙の言葉を代弁しているものと考えられる (Plessis は直説法としている)。
- 18) *dulce et decorum est pro patria mori*: テュルタイオスの *Τεθνάμεναι γὰρ χαλόν ἐνὶ προμάχοισι πτόντα ἄνδρ' ἀναθόν περὶ ἧ πατρίδι μαρναμένον* (勇者にとって第一線で戦って祖国のために死ぬのは素晴らしいことだ) という句に, *dulce* の一語を加えることによって詩人はこの句のエートスを深めたこととされる (Villeneuve, Plessis, K. H., ad loc.)。
- 19) シモーニデースの *ὁ δ' αὖθ' ἀνάτος κίχεν καὶ τὸν φρηγόραχον* (さらに死は戦いから逃げる者をもつかまえた) を訳したものとされる。
- 20) *virtus*: このラテン語は一個の男子, *vir* を形成する資質の総体をいう (*ἀνδρεία* と *ἀρετή* を一つにした概念, Villeneuve). K.H. はこれを, 勇気, 剛勇 (Tapferkeit) と真の男子としての志操 (Gesinnung) を併せたものとして考えられる *Mannheit* であると説明。
- 21) *securis*: 榆などの小枝と共に束ねられて束桿 (*fascis*) をなす斧。高級政務官の在職中は *lictors* がこれを運ぶが, 免官または追放になると破却された。官僚にとって栄達, 名誉の象徴だった。ここは, *virtus* をそなえた人物は, *fascis* を与えたり奪ったりする大衆の気粉れを超越しているとの意。
- 22) 人間は本来死すべきものであるから 天界への道は閉ざされている。
- 23) *est et fidei tuta silentio merces*: シモーニデースの *Ἔστι καὶ σιγᾶς ἀκίνδυνον γέρας* (沈黙には危険のない報酬がある) を訳したものとされる。沈黙は一見消極的であるが, 以下にみるように, 聖事に関してはきわめて重要な *virtus* の一要素である。
- 24) *Dispiter*: *Iuppiter* の古い形で *Ζεὺς πατήρ* に相当 (Williams, *The Third Book*, p. 36の注2を参照のこと)。
- 25) *incesto*: 宗教的見地からの悪人。
- 26) *fulminantis Iovis*: 「雷霆ふるうユーピテル」は神話であるが, ここではあくまでも南風と共に猛威をふるう自然現象としての扱いである。神話的狀況にあれば, *iustus et……vir* といえども最高神の警告ないし威嚇に

反逆することはあり得ない。

- 27) *hac arte*: 第1.2 聯で描かれた *constantia* をさす。
 28) *purpureo: claro et splendido* (Parphyrio).
 29) *hac=hac arte*.
 30) *Quirinus*: ここでは神となったロームルスの名前。ローマ宗教ではユーピテル、マルスとともに三主神を形成。普通軍神マルスの子とされる(母はアルバ・ロンガの王ヌミトルの娘レア・シルウィア)。
 31) *Ilion*: トロイアの別称。
 32) *fatalis incestusque iudex*: ユーノー(ヘーラー), ウェヌス(アフロディーテー), ミネルヴァ(アテーナー)三女神がイーデー山中で美を競った際の審判となったパリスのこと。*mulier peregrina* はヘレネー。
 33) アポルローとネプトゥーヌス。
 34) *Lacaenae adulterae*: スパルタ王メネラーオスの妃だったヘレネー。*hospes* にかかる属格ととる(K. H., Plessis, Page, Klingner など。Villeneuve と Williams はこれを与格にして「姦婦の目に美しく輝く」と解釈している)。
 35) *Troica sacerdos*: レア・シルウィア(またはイーリア)。注30) 参照。
 36) *discere nectaris sucos*: *ducere* (飲む) との読みもある(Page, Wickham, Williams) が, Plessis の解釈に従う(他に K. H., Villeneuve, Klingner, Porphyrio も *discere*)。
 37) *Priami Paridisque busto*: 戦争の舞台となったトロイアの地。
 38) *Medis*: ここではパルティア人のこと。
 39) *medius liquor*: ジブラルタル海峡。
 40) *Quiritibus*: 新しい神クイリーヌス(=ロームルス)の民, ローマ国民。
 41) *Argivis*: ここではユーノーの愛するギリシア人全体をさす。アルゴスには女神の神殿があった。
 42) *regina Calliope*: *regina* は女神の尊称となるが(cf. II_{26,11}, ウェヌスについて), ここでは詩を司ってムーサエの中でもっとも重要なものとして扱われているカルリオペーの尊称として相応しい(cf. Hesiod. *Theog.* 79).
 43) *voce acuta*: 普通は笛か琴に合わせて歌うが, もう一つの方法として, 無伴奏で歌うことをさす。K. H. は *assa voce* (無伴奏で, 声だけで) としての *voce acuta* の用法を疑問視している。
 44) *seu fidibus citharaque Phoebi: fides* は絃楽器の総称で, そのうち代表的なのがキタラとリュラ(*lyra*)。絃そのものは *chorda, nervus* という。ここではリュラのことであろうか。なお *citharaque* を *citharave* とするテキストもある(Williams, Villeneuve, Klingner) が, これは, —ve とした場合カルリオペーの選択が四つになるのではないかとの Page の疑問に答えていないように思える。
 45) *auditis*?: 少女たちや少年たち(III_{1,4})にカルリオペーの歌が聞こえるかと尋ねているのであろう(Williams はこれをまったく別様に解釈している, *The Third Book*, p. 50).
 46) 詩的な神憑状態におちること。
 47) *me fabulosae Volture in Apulo/nutricis extra limina Pulliae*: Hor. の作品でもっとも解釈の分かれる箇所の一つ。Klingner, Villeneuve, Williams(*Vulture*), K. H. (*Appulo*) などに従った。他は, *altricus extra limen Apuliae* (Page, 私の養いの地アプーリアの境界の向う側で), *altricus extra limen Dauniae*

(Plessis, ダウニア(アプーリアの一地域)生れの乳母の家の外で, Paldamus によるもの) など, Wickham は *nutricis extra limen Apuliae* としている。Vultur (または Vultur) 山はアプーリア, サムニウム, ルーカーニアの三地方が境を接する標高約千三百米の山で, 詩人の生れた町ウェヌシア(現 Venosa)を見おろし, アウフィドゥス川の源でもある。

- 48) *Aceruntia* (または *Acheron-, Acheruntia*): ウォルトゥル山上にあってルーカーニアとの境にあるアプーリア人の小さな町, 現在の *Acerenza*。

Saltus Bantini: ウォルトゥル山の南面にあり, ウェヌシアと境を接するアプーリアの町, バンティア(現 Banzi) のこと。

Forentum: 今日の *Forenza* の近くにあったアプーリアの町。

この三つの町は共に詩人の故郷ウェヌシアの南東に位置して隣接しており, この事件がいかに多くの人々に知られたかを示唆する。

- 49) 月桂樹はアポルローに, ミルテはウェヌスに聖別された(Verg. *Buc.*, VII₂₂, «*formosae myrtus Veneri, sua laurea Phoebo*»).

- 50) *Camenae*: ムーサエと同一視されたローマの女神たち。

- 51) *arduus Sabinos*: ローマ北東に位置するサビーニーの山中に詩人の別荘があった。

- 52) プラエネステ(現 *Palestrina*), ティーブル(現 *Tivoli*), バーイアエ(現 *Baja*, しかし古代バーイアエ区域は今日海没しているという)はいずれもローマ人の愛好した行楽地。詩人が都会を離れ自然の中へ入るとき(cf. *Epist.*, II_{2,77} «*scriptorum chorus omnis amat nemus et fugit nrhem*») 彼はムーサエの僕となる。

- 53) *M. I. Brutus* 軍に投じたときの体験(42年)。Cf. II_{7,9-14}。

- 54) Cf. II_{17,27-29}, II_{13,1-5}, III_{4,27}, III_{8,6-8}。

- 55) *Palinurus*: テュルレーヌ海に突出するルーカーニアの岬。

- 56) *Bosphorum*: 黒海と地中海を結び, トラーキアとアジアを隔てる海峡(= *Βόσπορος Θρακίος*)。

- 57) *Concanum*: スペインのカンタブリー人のこと。当時ローマはまだこの異民族を征服していない(26年アウグストゥスによって開始され, 19年に至って漸くアグリッパが完了する)。ウェルギリウスは, ピーサルタエ人(ストリュエモン川下流に隣接するトラーキアの住民)やゲローニー人(スキュティアの一部, 今日のウクライナ地方の住民)が馬の血を凝乳と共に飲むと記している(*Georg.*, III₄₆₀₋₄₆₃)。

- 58) *Scythicum amnem: Tanais*, すなわち現在の *Don*。

- 59) 31年アントーニウス軍とアクティウムで戦いオクターウィアヌス(アウグストゥス)に勝利をもたらした12万人のいわゆるヴェテラン兵らを引退させ, 植民市の土地を分与した処遇をさす。

- 60) *Pierio antro*: ピーエリア(*Περία*)はテッサリアと境を接するマケドニアの南東部, ハリアクモン河の南の地方。地名はピーエロス王(*Πίερος*)に因む。この地方では王の娘とされたピーエリデス(*Περίδης*)がムーサイとして崇拝された。

ここはアウグストゥスの教養, 文芸趣味を暗示(Suet. *Aug.*, 81-89)では彼が着手しながら反古にした悲劇《*Ajax*》のエピソードその他が伝わる)。

- 61) *dato gaudetis*: アウグストゥスは神々にうかがいを

- たてて忠告・助言を受け取って済ませるだけではなく、それにもとづいて行動するという意。
- 62) オートスとエピアルテース。いわゆるアローアダイ。巨人ではあるがギガントマキアの一員ではない。
- 63) テュフォーエウス以外はすべてギガントマキアに参加した Gigantes.
- 64) avidus: Plessis の《avidus pugnae》による。
- 65) Castaliae: パルナッソス山にあってアポルローとムーサエに聖別された泉。
- 66) Lyciae: カーリアとパムフェーリアの間にある小アジアの国。
Patareus: Patara の。パタラはリュキアの港町で、アポルローの神託で名高い。
natalem silvam: 母レートーが彼を生んだデーロス島にある神聖な林苑のこと。ピンダロスの「ポイボスよ、リュキアとデーロスの主よ、パルナッソスのカスターリア泉を愛でる御身よ」(Λύκιε καὶ Δάλων ἀνάσσων Φοῖβε, Παρνασσού τε κρήναν Κασταλίαν, φιλέων, Pyth., I, 39) を参照のこと。
- 67) 神々に対する不敬の結果を簡潔に表現したもの。ピンダロス、「しかし力が、力におごる者を遂には投げ落した」(Βία ὅτι καὶ μέγαν λαχόν ἐσφαλέν ἐν χρόνῳ, Pyth., VIII₁₅) を参照のこと。
- 68) Orcum: オルクス。ローマの死の神、ここでは冥界の意。ギリシアのプルートーン。
- 69) Tityi: ゼウスの子で、レートー(ラートーナ)を犯そうとするが、アポルローとアルテミス(ディアーナ)に射殺されたという。冥界で禿鷹がつねに再生される彼の肝を食う。
- 70) Pirithoum: 親友テーセウスとともに冥府へ降り、妻にするべくペルセポネーを地上へ拉致する計画だったが逆に捕われる。のちにヘルクレスがテーセウスだけは救い出すが、ピーリトウスを救うことは神意に合わず断念したという。
詩人がオーリーオーン、ティテュオス、ピーリトウスを語る狙いはアントーニウスにあり、彼がクレオパトラに惑溺した事実を暗示するものであるとの解釈がしばしばなされる (Page, Plessis, Villeneuve など)。
- 71) Britannis gravibusque Persis: いずれも版図の端境でローマを脅かす民族 (cf. I₂₁, I₆)。ここでいうペルシア人とはパルティア人 (Parthi) のことで、カスピ海東南地方にいたが、前 247 年セレウコス朝に対する反乱を契機として以後インダス河からユーフラテス河に至る王国をうち建てた騎馬遊牧民族。ローマとの抗争は 270 年間にわたるが、ローマ側の遠征計画はしばしば失敗、前 20 年アウグストゥスは平和条約を結んでいる。
- 72) Crassi: 三頭官クラッス (Marcus Licinius Crassus)。55 年パルティア遠征を開始、53 年息子 (Publius Licinius Crassus) も加えて、北メソポタミアのカルラエでスーレーナース率るパルティア軍と対戦して敗れる。プルータルコスは、この際の戦死者二万、捕虜になったもの一万と伝えている (Crass, 31)。この捕虜の中には生き永らえるため現地の女性と結婚し、ローマ軍と対戦する危険も顧みずパルティア軍に名を列ねた者もいたとされる。この会戦で奪われた軍旗は 33 年後にローマに返還された。
- 73) Marsus: マルシー人 (Marsi) はラティウムの住民、その勇敢さは伝説的だったのでよく引証される (II_{20,18})、
- 74) anciliorum (=ancilium, gen. pl.): 天界からヌマに送られた一個の盾とこれに似せて作られたという十一個の盾のこと (Plout, Numa, 13)。nominis: ローマ国民たるの名、軍務忘却を暗示 (Plessis)。togae: ローマ人がその名において着する、いわば制服。ウェスタの火についてはいうまでもなく、ローマ人としては忘れるはずのないものを列挙。
- 75) trahenti をとる (trahentis, Wickham)。
- 76) Reguli: Marcus Atilius Regulus, 267 年と 256 年の執政官。第一次ポエニー戦役のさなか (255 年) アフリカでクサンティップスと干戈を交えて敗れ、捕われる。のちに (250 年頃) 捕虜交換交渉の使節としてローマへくるが、交換無用を訴えた。
- 77) libero: K. H. は「まだ自由に自らを意のままにできた、敵の手中に陥ってはいなかった (のに易々と縛られた)」の意で解釈している。
- 78) カルターゴーでは一見して平時の生活が送られていることを伝える。
- 79) もちろん皮肉である。
- 80) damnum: Orelli は金銭的損失ではなくて、かかる先例から生じるであろう別の形の損失と解釈 (Page, ad loc.)。
- 81) 本来臆病な鹿が罠に陥ったからといってすぐ好戦的になることはなく、自由になった後も耐えてきた死の恐怖が勇気を根絶してしまう。カルターゴーの罠にかかったローマ兵もこの鹿に変わるところはない。かくしてここから第 10 聯にかけては、第 7 聯同様に、おめおめ敵に降った者への烈しい皮肉である。
- 82) 死は義務、生は恥辱、この間にあってローマ兵士は躊躇しなかった。レーグルスの (そして詩人の)、生き永らえる唯一の方法は果敢な戦闘だけ、との思惑に反して、彼が思考したのは「いかにして生命を守るか」ということだった。
- 83) capitis minor: 法律的に capitis deminutio の状態にある者。戦争捕虜と奴隷は同義であり、したがって本来の市民としての権利を失う。レーグルスは夫婦の絆も親子の縁も失った者として振舞う。なお彼の妻の名は Marcia と伝えられる (Silius Italicus, VI₄₀₃, 576)。
- 84) egregius exul: egregius の原義は「群から出る」、すなわち衆に抜きん出ることであり、ここではレーグルスが亡命者——法的な exul ではないが自分の意志で永久にローマを去る点でこれに等しい——として、それも敵地での刑死を覚悟して故国を去ることにおいて他の亡命者 (捕虜) とは異なるの意。通常亡命は国内での罰を免かれるためになされる (K.H.)。
- 85) Cf. Cic. de off., III₁₀₀ 《neque vero tum ignorabat se ad crudelissimum hostem et ad exquisita supplicia proficisci》。
- 86) Venafranans agros: オリーブで名高い。
- 87) フェラントス (Φάλαντος) のこと。Cf. II_{6,11-12}。
- 88) 28 年にアウグストゥスが開始した宗教復興政策との関連が考えられる。
- 89) G. Dumézil, Idées Romaines, p. 129 を参照のこと。
- 90) Hesperiae luctuosae: luctuosae は神々の行為の結果である。Hesperia はここではイタリアのこと。
- 91) 詩人の制作当時から回顧した場合、パルティア王国を相手の最近の敗北は三度ある。まずクラッスのカルラエでの惨敗 (53 年、前註 72 参照)、シュリアにおけるデキディウス・サクサの敗戦 (40 年、相手はパルティア軍に投じていた元ローマ軍将校 Q. ラビエヌスと、オローデース王の子パコルス、Dio Cass., XLIII₂₄₋₂₅)、アントーニウスの遠征失敗 (36 年、相手はパルティア王フラ

アテース、とくにオッピウス・スターティアヌスの指揮する二軍団がアトロパターネーで殲滅された, Plout. *Ant.*, 38; Dio Cass., XLIX₂₅).

詩人が *bis* (二度にわたって) と語る事実がどれをさすのか議論が多い. Porphyrio は Monaeses と Pacorus という二人物に結びつけ, クラッスとサクサの敗戦とする. Plessis, Villeneuve も同様. Mommsen はこれを斥けアントーニウスとサクサのことであるとす (Plessis, *ad loc.*). Williams もこの説に与する (ただしアントーニウスの代りにスターティアヌスの名を挙げて, 相手をモナエセスとしている). K. H. はカルラエの戦いは詩人の少年時代 (65年誕生) のことで, *impetus nostros* (我々の世代の攻撃) という表現にそぐぬものとしてこれを除外.

K. H. の説は根拠が弱い. 第9行で *bis* に続いて挙げられるパルティア人名はモナエセスとパコルスだけで, クラッスに関する言及はない. それにクラッスを叩いた敵はモナエセスではなくスレーナース (前註72参照) であり, しかも, アントーニウスの遠征の前年 (37年) にフラアテース王を嫌って彼に庇護を求めてきたが, 翌年和解して王の許へ帰ったパルティア貴族の名がモナエセスである (Plout. *Ant.*, 37; Dio Cass., XLIX₂₃₋₂₄) ところから, これを詩人が挙げているのと同人物であるとして, クラッスの敗戦は無関係であるとするのが Page らの説である. 一方 Plessis はカルラエの敗戦からアトロパターネーでの二軍団全滅までは16年の隔たりしかなく, 重要人物であるモナエセスはカルラエの戦場にもいたことが十分考えられ, さらに, Orelli に従って, Dio Cass や Plout. の挙げる *ὁ Εουρήνας* は人名というよりむしろ肩書と見做すことが可能であるとしている.

モナエセスなる人物が実際にどの戦闘に参加したの

か明らかでない. 確かなのはパコルスの名でデキディウス・サクサの敗戦(40年)が示唆されていることである.

- 92) *inauspicious*: Williams, K. H. Klingner による *Book* (他は *non auspicatos*, cf. Williams, *The Third* p. 60, n. 2).
- 93) *Dacus et Aethiops*: アクティウム (アムブラキア湾の入口で, アカルナーニアからテスプロティアに向けて突出している岬) の海戦 (31年) でアントーニウス側についたダキア人とエジプト人のこと. クレオパトラの艦隊は二百隻 (Plout, *Ant.*, 56).
- 94) *Disciplina domestica* の崩壊 (K. H.). この聯は風俗の乱れが家庭生活から始まって次第に大きくなり, 公的な問題になったことをさす.
- 95) *de tenero ungui*: 「心の底から, 完全に」との解釈もある. Williams, *The Third Book*, pp. 62-63 を参照のこと.
- 96) *infecit aequor sanguine Punico*: 第1次ポエニー戦役. シキリアの西にあるアエガーテース諸島で C. ルターティウス・カトゥルスがハミルカル, ハンノンのカルターゴを破って終結 (241年).
- 97) *Pyrrhum*: エーペイロスの王 (319-272). *ingentem (=magnum) Antiochum*: セレウコス朝のいわゆる「大王」(三世, 241-187). 後者は晩年のハンニバルを庇護したことがある. すべてローマの強敵.
- 98) *amicum tempus*: *εὐφρόνη* (Pind. *Nem.*, VII, 3) すなわち *nox*.
- 99) *Πάνθ' ὁ μέγας χρόνος μαραινεί* (強大な時はすべてを消し去る, Soph. *Ai.*, 714), *tempus edax rerum tuque invidiosa vetustas omnia destruitis* (諸物に貪欲な時よ, 妬み深き年月よ, 汝らは万物を破壊する, Ov. *Mel.*, XV₂₃₄).